概　要　報　告　書

１　視察期間　令和元年１１月１４日（木）～ １１月１５日（金）

２　視察先及び視察事項

社会福祉法人アルペン会あしたねの森（１１月１４日）

子どもと高齢者がともに支え合える環境づくりと自立支援の取り組みについて

総曲輪レガートスクエア（１１月１５日）

富山市まちなか総合ケアセンターについて

「医療・福祉・健康」をテーマとした官民連携の複合施設「総曲輪レガートスクエア」について

３　目　　的

【社会福祉法人アルペン会あしたねの森】

当該施設においては、高齢者施設、保育施設、障害者施設を併設し、日常的な多世代交流を進めるとともに、高齢者や子どもの自立支援に向けた取り組みを実践していることから、これらの取り組みについて視察し、今後の審査等、種々参考にしたい。

【総曲輪レガートスクエア】

当該施設は、「医療・福祉・健康」をテーマとした官民連携の多世代交流健康拠点施設として、多くの市民の方に利用されている。

市の施設である富山市まちなか総合ケアセンターでは、子育て支援や在宅医療、地域コミュニティの醸成などを推進するための事業を展開し、乳幼児から高齢者、障害者などすべての地域住民が安心して健やかに生活できる健康まちづくりを推進していることから、これらの取り組みについて視察し、今後の審査等、種々参考にしたい。

４　概　　要

（１）　社会福祉法人アルペン会あしたねの森

「子どもと高齢者がともに支え合える環境づくりと自立支援の取り組みについて」

１１月１４日（木）午後１時３０分～午後３時

あしたねの森において、施設見学の後、担当職員による説明が行われた。その後、質疑応答が行われ、粕谷委員長のあいさつをもって終了となった。

【説明】

特別養護老人ホームが地域密着型として２９床、ショートステイは１０床ある。特別養護老人ホームは満床となっていて、ショートステイは大体８０％の稼働率である。デイサービスは定員７０名に対して６５名程度の利用者がおり、平均介護度は３前後である。こども園は定員が１３５名で、保育園の枠が１２０名、幼稚園の枠が１５名である。新興住宅地が近くにあることもあって、０歳から２歳ぐらいま

での入園希望者が毎月平均５、６名いる。保育士の数も少なく、受け入れが難しいのが現状である。学童棟には午後３時過ぎぐらいに子供がやってくる。学童クラブと障害児を受け入れる放課後等デイサービスを併設していて、放課後等デイサービスでは、小学校まで迎えに行ってから施設で過ごし、保護者の迎えを待つ間に一般的な療育を提供している。

高齢者棟、保育棟、学童棟においても全て自立を目指しているので、大人が大人のやるべきこと、例えば何らかの身体障害が残ってしまった場合でも、残された能力をいかに使うか、いかに自分の体で生活するかということを目指している。こども園では、これから身に付けるものが多いので、まずは自分の身の回りのことをしっかりとする、その後自分のできることを伸ばしていく、新しいものに挑戦していくという考え方である。学童クラブではこども園を卒園した子供が多いので、新しいことに挑戦するというよりも、自分のできる能力を伸ばしていこうと考えている。放課後等デイサービスでも、自閉症やＡＤＨＤなどの何らかの診断を受けている子供が多いが、そうした子供に対しても自分のことは自分でやるということに加えて、少し難しいことに挑戦していくようにしている。

施設名称の「あしたねの森」とは、「また明日ね」と明日への種をまこうということで名づけた。社会福祉法人アルペン会は、あしたねの森から車で１０分ぐらいの距離のところにアルペンハイツという拠点を持っており、そこでも複数のサービスを提供している。

社会福祉法人のほかに医療法人を持っていて、最初は医療法人から立ち上げた。診療所が一番初めであり、その後、社会福祉法人アルペン会を立ち上げ、その時に特養やショートステイやデイサービスといった高齢者に関する事業を先駆けて行った。その後、アルペンリハビリテーション病院というリハビリに特化した病院を開設した。あしたねの森を開設したきっかけは、両親の姿を子供が見られるように、アルペンハイツに託児所を設けていたが、託児所が手狭になってきて、地域からの保育ニーズも高いということもあり、保育園を立ち上げるためにあしたねの森を開設した。看護師や病院職員、社会福祉法人職員の子供が安心して子育てができるように保育園を立ち上げた。職員も自分の子供と一緒に出勤してきて、自分の子供と一緒に退勤できるので、職場への復帰率も高く、早期復帰も多い。保育園や親のデイサービスやショートステイの利用を考えている職員もおり、そうした職員の役にも立ちたいと思っている。

特養に関してもデイサービスと同じように自立を目指している。自分でできることは自身で行っている。洗濯物を畳んだり、机の上を片づけたり、自分で料理を行ったりしている。デイサービスでは、日常の生活動作を大切にした活動を行っていて、食事も上げ膳据え膳ではなく、自分でとってもらう。こぼしてもいいので味噌汁やごはんは自分でよそうようにしている。プログラムごとに単価を設定して、施設内通貨（ユーメ）で支払いを行い、金銭感覚を忘れないような取組みも行っている。

こども園では、多世代交流をしながらも自分でやらなければいけないことをできるようにしている。ヨコミネ式保育を導入し、他人との壁がなく、コミュニケーション能力が高く育っている。入園の説明の際に、デイサービスや特養の老人との交流

があることを説明したうえで入園してもらっているので、今まで大きなトラブルや事故はない。

デイサービスの利用者やこども園の園児は、施設内を自由に行き来できるので、ハロウィンには園児が仮装をして、デイサービス利用者のところにお菓子をもらいに行ったり、デイサービス利用者の誕生日には、園児がバースデイカードをつくってお祝いをしたり、特養の部屋の表札の下に似顔絵を描いたりといった多世代交流を行っている。日常生活の中でイベントを企画することもあれば、園庭で遊んでいる子供たちを２階で体操をしながら見たり、年長、年中のレスリング大会に利用者を招待したりしている。職員が普段促してもできないことが、子供たちと触れ合う中でできるようになることを痛感した。子供たちも高齢者とふれあうことが励みとなることがある。

【質疑応答】

質疑：特養の入所者はデイサービスの利用者に比べて、介護度が高いと思うが、そうした人たちはどう過ごしているか。

応答：ずっと部屋で過ごす人はいない。ショートステイとデイサービスは行き来を自由にしているので、 フロアに出て、そこで過ごしている。特養の利用者もデイサービスのところに出てきて、できることをやったり、何かしていることを見たりしている。

質疑：世代間の交流を行っているが、交流する時間を設定しているのか。それとも自由にさせているのか。

応答：イベントの際には時間を決めている。雨で外に出られない時などにデイサービスのところに行って過ごすなど、時間を決めていない時もある。

質疑：時間を設定していない時には職員が立ち会っているのか。

応答：子供たちの場合は職員が見ているが、ある程度自立度の高いデイサービスの利用者の場合には職員に申し出て、職員を連れずにこども園に行くこともある。外に散歩に行けないが、施設内を周ることができる。

質疑：世代間交流の課題はあるか。

応答：デイサービスは介護保険課、特養も介護保険課または長寿福祉課、こども園はこども支援課、学童もこども支援課、放課後デイサービスは障害福祉課なので、何かするときの申請などの際に、たらいまわしになってしまう。保育園の厨房と特養の厨房を一緒にしたかったが、担当が違う、前例がないために不可となった。学童棟は障害福祉課とこども支援課が所管する２つのものが一緒になっているため、学童クラブと放課後等デイサービスでそれぞれ玄関をつくりなさいと言われた。富山型デイサービスでは高齢者のデイサービスと通所介護、ショートステイ、放課後等デイサービス、学童クラブと一緒になっているところがあり、一緒にいてメリットはあると思うが、各世代でやらなければいけな

いことが違い、各世代の課題や時間の流れも違う中で、それを共有するのではなくて、日常生活の一部分だけを共有して互いに頑張っていこう、支えあっていこうということで、あえて富山型デイサービスと異なり、建物を別々にした経緯がある。

質疑：富山市の待機児童数はいかがか。
応答：待機児童はゼロと言っているが、中心部だけで言えば、希望のところに入園できなかったということはある。

質疑：こども園から学童クラブにそのまま入る子供は、成績がよさそうに思えるが、どうか。
応答：二分している。そのままがんばる子供もいるが、一方で、１、２年生のころは成績が良かったが３年生以降に逆転される子供もいる。学童に来ている子供は自分の学年より上の勉強をしている子供もいれば、下の学年の勉強をしている子供もいる。このことは保護者の力の入れ方によって違うので、保護者にもこの現状を伝えている。

質疑：学童クラブの子供はここで宿題ができるのか。
応答：学童クラブで勉強を教えることはできないので、自主的に取り組んでもらっている。

質疑：学童クラブの開園時間は。
応答：午後７時までである。

質疑：延長料がかかるか。
応答：かからない。

質疑：世代間交流での高齢利用者への効果の例は。
応答：元教員のショートステイ利用者の帰宅願望が強く、夜も帰りたいと訴えていて夜勤の職員も休憩できない状況だったが、小学生が近くで勉強するようになってから、採点などの世話をするようになり、そのことが楽しみになったことで、帰宅願望が弱まったということがあった。

質疑：認知症の症状が和らいだということもあるか。
応答：前例で言えば、その瞬間は記憶がよみがえったように見え、教員らしく振舞っていた。

質疑：富山型デイサービスは国の補助金をもらって行っているのか。
応答：初めはもらっていなかったが、複合型は現在では共生型として認められているので補助金をもらっている。

質疑：補助金は１０年や１５年で縛りがなくなると思う。ここでのやり方のメリットがあると言っていたが、このことについてはどうか。
応答：建物を建てる補助金は、時の経過とともになくなっていくが、こども園は運営費をもらっていて、介護保険サービスを使っているので、建物としての上限はあるので、現状維持でないと苦しくなる。

質疑：保育士に要求される水準が高いと思うが、募集に苦労している点や、他と比べて給料はどうか。
応答：ほかの保育園の場合は、自由保育の中でいかに子供たちを伸ばすかというのは自分たちでやらなければいけない。また、人数をここまで制限していなくて、もっと多いと聞く。ここでは指導のスキルは求められるが、他の保育園では対子供の人数や自由保育の中で教材研究をするのに忙しいと聞く。こちらでは残業は全くなく給料は低いと思う。その代りにサービス残業はゼロである。

質疑：病児保育はやっているのか。
応答：別の事業者がやっている。

質疑：このようなネットワークをつくっている法人は、ほかにもあるか。
応答：ほかにもあり、こちらよりも大きな施設もある。

質疑：富山型デイサービスとの違いは。
応答：富山型デイサービスは共生型サービスであり、こちらでは一つ一つが独立したサービスなので、単価が違ったりとか、条件が違ったりといったことがあると思われる。

質疑：共生型とは何か。
応答：同じ建物の中で高齢者用のデイサービスや障害者用のサービスを行っている。建物の条件や職員の配置条件が独立したサービスとは違う。

質疑：独立している方がやりやすいか。
応答：私たちはそう思っている。

質疑：独立して運営している事業者は、ほかにあるか。
応答：あると思うが、同じ敷地内にあって交流しているところはないと思う。

質疑：デイサービスを見学した際に階段で移動したが、車いすを使用している方はどうしているのか。
応答：エレベーターを利用している。

質疑：認知症の方と子供とのトラブルはないか。
応答：今までない。とても可愛がられている。

質疑：こども園の子供は全員バク転ができるのか。
応答：小さいときは大人に比べて柔軟性があるので、できるようになる。

質疑：幼児に跳び箱は早すぎるとの意見もあったがどうか。
応答：ヨコミネ式体操は、失敗してもけがをしなければ問題ないと考えている。大きなけがも今まで発生していない。

質疑：幼稚園の教育標準時間は４時間だが、保育園児と一緒に過ごすのか。
応答：皆さん預かり保育を利用して延長されている。保育園児と幼稚園児と全く同じ生活をしている。

質疑：こども園の職員数は。
応答：２０数名である。

質疑：こども園に通う子供のうち、職員の子供の数は。
応答：１０数名である。アルペンハイツに０歳から２歳までの小規模保育をしており、従業員枠を設けている。そちらと合わせれば２０数名いると思う。

質疑：アルペンハイツの小規模保育の定員は。
応答：定員は３６名であり、現在２５名在籍している。

質疑：こども園の職員の給与費は保育園とは別か。
応答：一緒である。

質疑：職員が業務効率化の取組を考えて行っているのか。
応答：そうである。たとえば折り紙やお絵かきをデイサービスの利用者と行っている。

質疑：塾のようなイメージを持ったが、そのようなイメージを持っているか。
応答：意欲を高めるための環境をいかにつくるかというのは担任保育士の力量によってすごく違う。柱とするものとして音楽、工作、遊びなどがあるが、それらをいかにやってみたいと思わせるか、色々なことをさせて、その中から習い事を始めたり、自学をさせて点数を上げるのではなく、事前に机に向かう習慣を自然につけるといった取り組みをしている。

質疑：経営の課題は何か。
応答：わからない制度が多いことである。

（２）　総曲輪レガートスクエア

「富山市まちなか総合ケアセンターについて」

「医療・福祉・健康」をテーマとした官民連携の複合施設総曲輪レガートスクエアについて」

１１月１５日（金）午前１０時～正午

富山市まちなか総合ケアセンターにおいて、施設紹介のビデオを視聴したのちに説明を受け、富山市まちなか総合ケアセンターを見学した。その後レガートスクエアの運営について説明を受けたのちにレガートスクエア全体を見学し、視察を終えた。

【説明】

（富山市まちなか総合ケアセンターについて）

富山市の人口は４１万６，０００人で高齢化率は２９．４％である。全国平均より少し早いスピードで高齢化が進んでいる。合計特殊出生率は１．５４である。

総曲輪レガートスクエアの敷地は、かつて総曲輪小学校があり、７つあった小学校が２つに統廃合されている。その統廃合された跡地を活用して、中心市街地に地域包括拠点として整備した。１０数年前から富山市ではコンパクトな街づくりを進めていて、公共交通の充実をはじめ、にぎわいの創出や定住人口増加のためにさまざまな取組を実施していた。そうした市の取組の一環として、さらに生活の質を高めるために子育てや教育、地域医療や福祉の充実、健康づくりの機能を集積させた健康で快適に暮らせる拠点、さらには人が集まり、にぎわいと親しみのある拠点として、官民連携で取り組んでいくこととしている。

その拠点となるのが、富山市まちなか総合ケアセンターと民間施設からなる総曲輪レガートスクエアである。小学校の体育館だけは残し、他は全部更地にして新築している。富山市医師会看護専門学校はＰＰＰ（公民連携）の手法を使って、公共と民間施設を一体に整備している。具体的には、民間事業者は中心市街地における市の施策の方向性を理解したうえで、まちなか総合ケアセンターと相乗効果が期待できる民間施設を提案して、結果的に大和リースが採択されているが、設計・施工までを大和リースが手掛けて、出来上がった時点で公共部分を市が買い取っている。グンゼスポーツや広貫堂カフェは大和リースのテナントである。土地は市有地で、大和リースと富山市医師会と３０年間の借地契約を交わし貸付を行っている。総曲輪レガートスクエア内には民間の学校やレストラン等がある。

富山市まちなか総合ケアセンターについて、こども発達支援室を指定管理にしており、それ以外については直営にしている。まちなかサロンは市民が交流できる場所となっている。まちなか診療所は在宅医療を専門としており、外来診療は行っていないため、施設内には事務所だけがある。そのほかに医療介護連携室、病児保育室、産後ケア応援室などがある。まちなか総合ケアセンターでは、行政サービスの空白となっていた部分のニーズに対応するた

めに新しいサービスの創設、機能の充実・強化を図っている。赤ちゃんから高齢者までということをコンセプトにしていて、誰もが安心して健やかに生活できる健康まちづくりを推進するために子育て支援、在宅医療の推進、地域コミュニティの醸成に取組みを進めている。

子育て支援について、産後ケア応援室は自治体としては全国初の施設で、宿泊可能な部屋が５部屋あり、日帰りの方にも部屋を使ってもらっている。連携中枢都市圏事業にも対応していて、近隣の４市町村の方にも使っていただいている。平成３０年度から市内に里帰り中の方も対象にしている。助産師が１５名いて、利用者の環境やニーズに応じてケアプランを作成している。市民病院では助産師を募集しても集まらないが、こうした場所で働きたいという助産師はたくさんいる。一人は市民病院の助産師だが、それ以外は常勤の嘱託、非常勤の助産師で、ハローワーク等にお願いして募集したところ、多数の応募があり、現在も問い合わせがある。保健師と精神保健福祉士がいて、心理的に悩んでいる方の支援も行っている。料金について、利用者の経済状況を考えると高価ではないかとの意見や市長がビジネスホテル並みにしたいということで。基本料金ではなく利用者負担額をいただくようにしている。連携市町村の方と里帰りの方は基本料金を支払っていただいている。連携市町村の方と富山市民との差額はそれぞれの市町村が負担するので、富山市民と同じ料金で利用できる。実績について、もともと富山市では出産年齢が高い傾向であり、３５歳以上が５０％である。そのため利用者も３５歳以上の方が４３％で、最高齢で５１歳初産の方がいた。産後の鬱になりそうな方や、もともと精神疾患の持病があり妊娠して薬を飲まなくなって状態が悪くなる方もいて、４割が気がかり母子となっている。利用した理由は、とにかくしっかりと睡眠をとりたいという方が９割である。当初２泊、３泊される方が多いと思っていたが、一泊二日が最も多くなっている。経済的な理由もあるが、一晩ぐっすり眠ると元気になって自宅で頑張れるという方が多くいる。子供と離れてみると、改めて自分の子供がかわいいと思えるといった感想が多くある。今年の４月から助産師による２４時間の電話相談を開始したところ、１日に１、２件ぐらいの相談がある。

病児保育室について、特徴はお迎え型病児保育事業である。保育園に預けた後、具合が悪くなった時にこちらに連絡をいただくと、保育士と看護師がタクシーに乗って保育園に迎えに行き、かかりつけの小児科を受診させて、保護者が迎えに来る午後７時まで預かっている。この事業については、市長が国に何度もお願いして、国の病児保育の要綱に送迎型というものが新たに加わった。そのことでタクシー以外の部分も補助がある。病児保育を利用すると２，０００円、お迎え型病児保育を利用すると２，０００円とタクシー代の四分の一がかかる。昨年度の利用者のタクシー代の四分の一の平均は約１，１００円であった。この事業は近隣市町村の方も利用できる。看護師４名と保育士６名がいる。実績について、事前に登録していただいて、利用してもらっている。病児保育の数は多いが、お迎え型についてはまだ件数は少

ない。事前登録は多くあるので、何かあった時にこのサービスが利用できるという保護者の安心感につながればよいと思っている。

こども発達支援室について、もともと別の場所にて指定管理で行っていたが、発達が気になる子供がふえているということで、訓練が必要な回数を実施できなかったということもあり、分室として同じように相談や訓練を実施している。常に１０名程度保育士がいて、それ以外の療法士については訓練がある日だけ来ている。初年度から相談は多く、相談が５，８００件、利用が１万２，０００件で、平均すると１日２０組ぐらいの親子が来ている。月曜から土曜まで開室していて、事業は相談と訓練で５つ行っている。近隣市町村の方については３つの相談を利用できるが、訓練については富山市民だけが利用できることになっている。

在宅医療の推進について、全国初の都市中心部の公設公営の在宅専門診療所である。機能強化型で在宅専門診療所だと重度の患者が対象となる。医師が３名、看護師が４名いる。診療を始めるにあたって、医師会の医師とも話をした。何に困っているのか、どんな診療所が望まれるのかを聞いて、最も多かったのが在宅医療のサポートであった。開業医だと医師が一人なので、学会や会議の予定などにより、その間に亡くなりそうな患者がいると心配で出席できないため、そのサポートをしてほしいということだった。そのため、国は主治医、副主治医を進めているが、それを含めてサポートするために、あらかじめ情報共有ができれば、代わりに往診代行、看取りも行っている。病院から在宅へ移ることで、頻回な訪問が必要な場合に受けてくれない医師もいるので、人口呼吸器をつけた方や末期がんの患者、終末期の方など頻回な訪問が必要な方は積極的に受けるようにしている。かかりつけ医を中心とした医療を目指しているので、状態が悪いとき、頻回な訪問が必要なときはこちらで主治医を代わって、状態が落ち着けばまた元の医師にかかりつけ医を戻すということをしている。在宅医療を推進するうえで、在宅医療のための人材育成や市民への啓発を行っている。実績について、患者数は１２４名で、そのうち終末期患者は７０名であった。死亡患者が５１名で、半数近くの患者が亡くなっている。また、そのうちの３９名を看取っている。３名の医師の受け持ちとしては少ないように思われるかもしれないが、がん患者が８割、終末期患者を６割受け持っているので、３人で１００件が妥当ではないかと考えている。

地域コミュニティの醸成について、人材育成を行っている。中心市街地を中心に健康まちづくりに取り組む人材ということで、健康まちづくりマイスターを平成２６年から５年間養成して、現在４２６名いる。マイスターは市民、専門職、企業に対して要請をしている。地域コミュニティの醸成はまちなか総合ケアセンターだけの取組ではなく、地域住民、ボランティア、ＮＰＯ、企業などと共同して多世代で多機能な輪をつくりだすための働きかけが必要だと思っている。平成２９年にレガートスクエアの官民で協議会をつくった。１階にまちなかサロンがあって、市民に開放されたスペースとなっ

ているが、市民が参加・交流できる機会を提供できる場所にしている。一緒に楽しめるイベントを企画できる方に無償で貸し出しを行っている。健康カレッジでは、月曜日から木曜日まで市民病院のスタッフがやって来て、健康講座を開催していて、金曜日にはまちなか保健室を実施している。午前中は５か月から１歳までの子供を対象に活動し、午後は戸別訪問などを行っている。総曲輪レガートスクエアの管理系の事業の実施については、ＮＰＯ法人のまちづくりスポットに委託している。交流スペースで活動する団体の育成・支援もまちづくりスポットに実施してもらっている。当センターには多数の専門職がいて４４名いる。職種の数は１２、３種ほどで、多様な事業を行っており、多くの方が富山市で暮らしやすくなればよいと考えている。

【質疑応答】

質疑：父親に対する子育て支援の取り組みは。

応答：サービスの提供自体は、母親と子供に対するものだが、母親の子育てが楽になれば、それは父親にもつながる。産後ケア応援室では開設当初、父親も来ていたが、今は全く来なくなった。それは今の父親たちは子育てに参加していて、子守に疲れている。母親がこちらに来ている間に父親も疲れを取っている。

質疑：まちなか診療所の医師と看護師は市の職員か。

応答：看護師は市民病院で確保できているが、医師は富山大学総合診療部の医師で、家庭医である。富山大学に寄付講座を開設して、総合診療医を要請してもらっている。平成２９年からこちらに来てもらって、３人は富山市の職員として働いている。

質疑：需要増大に対する見通しや対応は。

応答：診療所は、市長が地域包括ケアシステムを構築するために在宅ケアが必要であるということで開設した。他の機能については後からついてきたものだが、診療所をつくる構想があり、診療所だけではもったいないのでほかの機能も付けた。患者数はふえていて、このままでは対応できないのではないかと心配し、診療所拡大の議論もしたが、在宅医療の啓発をかなりやってきた。そのこともあって、在宅医療を提供する開業医が最近ふえてきており、そうした医師のところにこちらから患者をできるだけ割り当てているが、将来、今の形で継続するのは難しいと思っている。今は高齢者が中心だが、要ケア児などが手つかずになっているので、全世代を対象とすることを考えていかなければならない。

質疑：郊外の患者に対応する際の負担についてはどうか。

応答：富山市の端に４０分くらいで行ける。診療報酬上は１６ｋｍという縛りがあるが、医療負担がなければ１６ｋｍを越えても構わないことになっている。現在１６ｋｍを越えている件数が５件あり、今の体制で特に問題はない。

質疑：国の補助金は何割ぐらいか。
応答：１年間で使う金額が約４億円である。市の持ち出しは約１億７，０００万円である。

質疑：看護専門学校を卒業したら、そのまま働いてもらう展開なのか。
応答：そうではない。自身で希望するところに就職する。市民病院で働くことになれば人事異動でこちらに来るかもしれない。

質疑：産後ケア応援室の開設は市からの提案か。
応答：診療所以外にどのような機能をつければよいかを各課から提案を受けて、最終的に今の形になっている。産後ケアの相談は保健福祉センターからあった。

質疑：産後ケアについて参考にした事例はあるか。
応答：東京都世田谷区や山梨県山梨市が先進的に取り組んでいたので、視察した。産後ケアについては法的に位置づけがない。病院の空きベッドを利用して実施すれば、その改修費用と補助がでる。富山市では平成２９年度に旅館としてスタートしていて、旅館と助産所と飲食店の届け出をした。国に陳情して、昨年の産後ケアのガイドラインに、産後ケアセンターを位置付けてもらい、産後ケアセンター助産所型が新たに載った。法的には今年か来年に位置づけられると思っている。

質疑：ＰＰＰ方式のメリット、デメリットをどう考えているか。
応答：市が全部交渉をすると相当時間がかかるが、民間だと一斉にスタートして設計も同時に進行した。５月頃から工事を始めて、１２月頃には完成した。ＰＦＩと違って、ＰＰＰには維持管理がない。

質疑：ＰＰＰは経費の面からはどうか。
応答：１１億４，９００万円かかったが、安いと言われている。最初から予算を提示していたので、安くなった。

【説明】

（レガートスクエアの運営について）

複合施設としてスタートして、医療・福祉・健康の活動拠点となるよう整備している。コミュニティの醸成や市民の活動のサポートに力点を置いている。常時、約１，０００名が訪れる場所になっている。

レガートスクエアでは協議会を設置していて、そこで官民連携事業を実施している。レガートスクエアを使って、来場者の健全な発展や地域の活性化、にぎわい創出を目的にイベントや講座を行っている。協議会は、まちづくりスポットが事務局をしていて、法人の目的がもともと人と人をつないだり、ものや出来事を結ぶことで地域の原動力を活性化したいということである。

レガートスクエアをどのように活用してもらうかが重要である。母親向けのサークル活動のスタートアップや広報活動の手伝いをしている。先週は地域の方と交流する機会として、中庭の花壇に花を植えた。主な事業内容は公共・民間多目的スペースの管理業務、官民連兼事業の企画立案・実施、視察対応である。

まちなかサロンについては、交流を生み出すことに力点を置いているスペースなので、利用者にはオープンな活動をするようにお願いしている。来場者にヒアリングしたり、提案をしている。高齢者が椅子に座ったまま体操をしたり、親子での活動であったり、子どもの興味について考えるワークショップなどが開催されていて、さまざまな年代に利用されており、女性の利用者が多い。まちなかサロン登録団体数はふえていて、利用したい曜日や時間帯が重なってしまい、抽選を行っている。市民の活動拠点ということを考えた際に、法人の団体や活動の実績がある団体であれば、ほかの場所でも活動できるであろうと考えられるので、活動をこれから始めたいという方が利用できるように利用条件や登録条件を変更している。

ギャザリングスペースについて、商業的な活動も含めた利用も可能なスペースとして用意している。サロンでセミナーをやりたいという方がいたとしても、内容によってはギャザリングスペースの利用を提案することもある。和室、ギャラリー、バースペースを用意しているのでいろいろな形で利用されている。趣味に熱心に取り組む人がふえているので、そうした人のニーズに応えている。かき氷やタピオカドリンクなどのインスタ映えする商品を提供する店が出店したこともある。

官民連携事業について、まちなか総合ケアセンターが提供しているサービスだけではなくて、健康な状態を実現する場所や機会が必要である。実績について、親子ガーデンは非常に多くの方の参加があった。母親やシニア世代向けの３回の健康講座も開催した。講座終了後の交流会にも参加してもらえたことに大きな意義があったと思う。単なる健康に関する知識を得るだけでなく、交流することで精神的な部分も満たされるイベントになったと思う。イベントの開催に合わせて看護学校は学校体験の機会をつくっていた。青池学園の学園祭に合わせたまちなかサロンの文化祭の実施や、富山大学とも縁があるので連携ワークショップの開催や富山市民プラザ、越中大手モール、ユウタウン総曲輪との連動企画の実施など近隣の団体や施設と連携している。予算や人員の枠組みの中で企業や行政や民間団体が協力してイベントを行うことが交流のために重要だと考えている。

５　所　　感

当委員会では両日とも富山市内にある施設を視察したわけだが、一日目の「あしたねの森」や二日目の「総曲輪レガートスクエア」の両施設では、それぞれが同敷地内での設置であり、そこで多世代交流や、多種多様な業態が一つになって運営をしていた。

これらは、これからも人口減少や少子高齢社会が進んでいく中、コンパクトシティなど

まちづくりの在り方として必要性を感じ行ってきたとのこと。

当市としても、将来に向けて人口減少や少子高齢社会が進んでいくであろうと予測している中、特に核家族化やお年寄りの単身世帯が増えていくなかで街中のコミュニティの醸成が必要になって行くとともに、公共施設の老朽化が進みその有効活用の在り方などの課題もある。国の補助金等財源の問題もあり、また組織の横断的な連携も一層必要となるが、将来を見据えて考えて行かなければならないと思われ、有意義な視察となった。